

一昨年、私たちは「とりつ おせっ会」を旗揚げした。それは、2004年の白鷗での「つくる会」歴史教科書採択に危機感をもった数名の有志の呼びかけに端を発している。その後05年、06年、07年と小石川、両国、桜修館の4校に、新設の武蔵、立川国際を加えた都立中高一貫校の歴史・公民教科書は「つくる会」一色に染められてきた。今年、09年は、既設校6校の4年に1度の定期採択に、新設4校（富士、大泉、南多摩、三鷹）が加わって、10校の教科書採択が予定されている。これに対して、私たちはすでに行動を起こしている。去る3月5日には、4校の有志の会が「教科書採択は各校の教員の手に」という趣旨での請願を都教委に提出した。また、4校連絡会は10校連絡会に衣替えして新設6校を仲間に入れようとしている。分裂を重ね退潮にあるつくる会が、都教委にどれだけの影響力を残しているのか、どちらの派閥の推す教科書が都教委のお眼鏡にかなうのか、全くわからないが、この引き潮に「つくる会系教科書」が都立中高一貫校で取り残されるとしたらなんとも恥ずかしいことである。すでに、署名運動などを10校にひろげることが最初の課題である。

昨年の総会で、——「とりつ」とは何であったのか、「とりつ」の何を遺産として残さなければならないのか。東京都立大学附属高等学校が61回目の最後の卒業生を出す2011年3月までには、何らかの結論を出したい。——とのべた。これが、おせっ会の第二の課題である。1929年に創立された7年制超エリート校と、2006年創立のリーダー養成校6年制「桜修館」との谷間にトダイフコウはあった。1948年から2011年までの63年間を通して「トリツ」と「トダイフ」にひとつのイメージは湧かない。しかし「自由と自治」という言葉が引き継がれて来たことは誰でもが認める。昨年の創立総会で喜多先生の講演で最初の20年間のイメージが得られた。そして今年の石坂校長講演では、トダイフへの桜修館の接木がどのように行われたか、いかに困難な作業であったかの表明があった。この作業が第二の課題である。

現代日本の教育に大きな問題があることは誰もが認める事実である。文部省から文部科学省に名前は変わったが、教育方針の右往左往の伝統は引き継がれている。かつての「とりつ」に存在したような人間による教育を回復するために、父母や教師と協力して、「おせっかい」にもひとはだ脱ぎたい。これが第三の課題である。

これまで2年の活動を継承し、さらに新しいアイデアを結集して、これら3つの課題から発生する具体的な活動を模索する。たとえば次のようなものがあげられている。

1. 教科書採択・検定制度の問題を今年も取り上げて「つくる会」教科書の強圧的な採択が今後出来ないようにする。また4校から10校に仲間を増やす。

2. 教科書は採択の前に検定が行われる。採択制度だけでなく、検定制度も教科書のもとになる学習指導要領もターゲットにした活動を展開する。

3. 「・・・にとってのとりつ」を追求する。歴代校長のインタビュー、都高時報のよみなおし、などが考えられる。

4. この4月から「都立大学附属高校」の入学者は居ない。残る2学年の卒業生が「桜修館」の日陰者になることなく、自尊心を持って高校生活を送れるように見守りたい。

5. おせっ会は、これまで毎月例会を開いて、会員のさまざまな分野でのレポートを聞くことを実行してきた。教科書の問題だけでなく、教育の問題、文化の問題、国際交流の問題などである。これを継続すると同時に、他の9校などとも交流する。

6. 機関紙「まなこ」を発行する。

以上